2018年1月1日移転・新築オープン

TMGあさか医療センター始動

地域を永く支える病院

手術室 病室 将来拡張できる設計に

戸田中央医科グループ（＝TMG：中村隆俊会長）が運営する医療法人社団武蔵野会（中村毅理事長）は、朝霞台中央総合病院を「TMGあさか医療センター」（村田順院長）と名称変更し、1月1日に移転・新築オープンした。移転先は旧病院から約0・8キロ離れた旧東洋大学総合運動場・総合体育館跡地。地上7階建ての免震構造で建設された。病床数は120床増床しグループ内で最大規模となる446床を運用する。従来の診療機能に加えて、新たに緩和ケア、歯科口腔外科、精神科、神経内科を加えた28診療科を整備、救急医療および高度専門医療を担う。病院関係者は「地域に根ざした医療提供体制をさらに充実すべく病院機能の強化を図った」と意気込みを語る。

村田順院長

TMGあさか医療センターの院内は、白とグレーに加え木目調を基調にした落ち着いた雰囲気になっている。最長80メートルを擁する各階の廊下の突き当り4ヵ所に大きな窓を設置したことで、自然光を取り込んだ明るい雰囲気に包まれている。また、首都圏で今後急速に進む少子高齢化に対応するため、将来的に病床機能の転換等が求められた際に、施設基準への対応が容易にできるよう、手術室や病室を拡張しやすく設計するなどの工夫を随所に凝らしている。

1・2階の外来部門には「ユニバーサル仕様」の複数の診療科を整備した。外来の混雑状況や予約数に応じ、様々な診療科の診察室として使用する（小児科、眼科、婦人科等の専門科を除く）。

1階にはERを整備。また最新のCTおよびMRIを各2台「SPECT／CTを1台導入した。

2階には化学療法室（10床）、リハビリテーション室、検査科、内視鏡センター（6室）、透析・血液浄化療法室（5床）を整備。透析室には「放射空調システム」を採用し、患者に冷暖房が直接当たらないよう配慮した。さらに、廊下の壁面には災害時に活用する医療ガスや非常用電源を配置した。壁面のホスピタルアートの木片の一部を外すと利用できる仕組みになっている。患者待合のソファーも非常時にはベッドとして使用できるタイプを導入した。

3階は集中治療室（ICU・CCU、Neuro ICU）、手術センター、血管造影センターを整備。手術室は4室から8室に拡張した。手術室内には2系統の空調を導入し、快適な温度管理を実現することで、担当医やスタッフが業務に集中できる環境を整えた。また、一部の手術室は壁の取り外しが可能で2室を1室に拡張でき、将来的にハイブリッド手術室やロボット手術に対応できるよう設計した。

4階はてんかんセンター（11床）、脳卒中センター／SCU（9床）などとなっている。てんかんセンターでは、長時間脳波モニタリングによる一元集中管理が可能な個室を2床配置し、外科的治療など国内でも数少ないてんかんの専門治療を提供する。

2階の外来待合。壁面のホスピタルアートの一部を外すと医療ガスや非常用電源が配置されている

［上段］TMGあさか医療センターの外観［下段］幅2・8Mの廊下。青いラインの幅まで病室を拡張できる㊨。6階緩和ケア病棟のテラスルーム

各フロア4看護単位で運用

4～6階の病棟は、各フロアごとに4看護単位を採用し、各病棟のテーマカラーを、地域の自然（けやき、朝日、黒目川、桜）から緑、オレンジ、青、ピンクの4色を採用した。

4床室ではベッドサイドの仕切り家具に医療ガスを設置し、ベッドを挟んでケアを行う医療者サイドと反対側の家族サイドに導線を分け、治療の妨げにならないよう工夫した。また、感染症対策および病室の拡張を考え、病室内には水回りを設置せず、トイレ、洗面台は廊下側に配置した。現在は1床当たり8平方メートル、病棟の廊下は幅2・8メートルと余裕のある広さになっている。今後、医療政策の変更などで施設基準や医療機能の転換が求められた際でも、「廊下側に壁面を移動することで、簡単に病室を拡張できる」と病院関係者は説明する。

各病棟の入口には日本初となる加圧システムを導入。万が一火災が起きた際にも、他の病棟への延焼を防ぎ被害を最小限に抑えることができる。

6階には緩和ケア病棟を20床新設した。病棟内にはデイルームに隣接するテラスルームを設置、天窓や植物などを配置した四季を感じられる開放的な作りとなっている。ミニキッチンも併設、デイルームは周囲を隠すこともでき、家族と過ごす時間を楽しむこともできる。さらに、スタッフ用のトイレ内には、一人になって泣くことができるパウダールームも設置、スタッフの心のケアにも気を配った。

7階は多目的スペース「スカイラウンジ」を設置した。普段は職員食堂だが、ラウンジ内をパーテーションで区切り一般向けの医療公開講座などで利用する。

駐車場は290台が収容できる。災害時には避難エリアとして解放できるよう、マンホールトイレを7つ整備した。建物は免振構造を採用した。

1階のエスカレーターホールをメインに、センター内6ヵ所に展示されているホスピタルアートは東洋大学ライフデザイン学科の協力により作成した。材料は、同センター建設地の旧東洋大学総合運動場・総合体育館の敷地内に植えられていたケヤキ等の樹木を再利用した。学生や病院スタッフ、建設作業員やその家族ら650人が木片に色を塗り完成させた。

TMGは埼玉県内を中心とした首都圏で、住み慣れた地域内で完結する医療・介護・保健・福祉サービスの提供に努めてきた。TMGあさか医療センターのオープンにあたり、病院関係者は「地域を永く支える病院を目指し、地域の人たちの健康を暮らしの場所で守っていくための機能を充実させた」と述べ、さらなる地域への貢献を誓う。

埼玉県南西部の急性期医療担う

TMGあさか医療センターの前身となる朝霞台中央総合病院は、1977年（昭和52年）に病床数122床、6診療科で開設以来、埼玉県南西部地域を中心に急性期医療の提供に努めてきた。朝霞、新座、志木、和光の4市は以前より公的病院の整備が手薄いエリアだったことから、同院では地域の中核的医療機関としての役割を担うため、施設整備や診療機能の拡充や増床に伴う増改築を続けてきた。また、朝霞市を含む近隣4市は都心のベッドタウンとして発展を続けてきており、2000年代に入っても人口が増加傾向にあり、現在は45万人の医療圏を抱えている。こうした背景から2000年（平成12年）には県の地域保健医療計画により70床の増床許可を受け、04年（同16年）に病棟を改修、さらに13年（同25年）に120床の増床許可を受ける。しかしながら、旧病院は築約40年が経過し老朽化・狭隘化が進んでいたことから、増築スペースが無い状況だった。その頃、旧病院から約0・8キロ離れた場所に位置する東洋大学が所有する敷地の一部を売り出す計画が浮上していたことから、土地を取得、移転新築に踏み切った。新病院は、16年（同28年）1月着工、17年（同29年）10月竣工、本年1月1日にオープンした。

TMGあさか医療センター

住所＝埼玉県朝霞市溝沼1340－1▽**新病院の概要**＝敷地面積2万3434・56平方㍍。延床面積2万5509・23平方㍍。地上7階、免震構造▽**病床数**＝446床▽**診療科目**＝内科、呼吸器内科、循環器内科、消化器内科、腎臓内科、心療内科、外科、呼吸器外科、消化器外科、小児外科、肛門外科、整形外科、脳神経外科、形成外科、小児科、皮膚科、泌尿器科、婦人科、眼科、耳鼻咽喉科、リハビリテーション科、麻酔科、放射線科、精神科、神経内科、歯科口腔外科、緩和ケア内科、救急科

〈病院理念〉

高度な医療で愛し愛される病院

患者様を自分の家族と思う医療

〈理念の実行方法〉

地域住民、地域医療機関と密着した医療

連携組織による24時間救急体制の実施

何人も平等に医療を受けられる病院

医療人としての自覚と技術向上のための教育

最新医療機器の導入による高度な医療